

私のみたアイオワ州

木戸台 伊藤 斉 紀

私は三年前、アメリカは五大湖の近くのアイオワ州で、一年間の短期間ではあります、が、一農家に家庭生活を共にし、農業研修をして参りました。農業技術及び農業経営云々というよりも私なりにみた農家の日常生活または外国において感じた点を二、三話してみようと思います。

アメリカのコーンベルト地帯の中心地であり、とうもろこしを自給飼料としての肉牛及び豚の畜産ステートである。アイオワは、見渡す限りとうもろこし畑、牧草地と僅かの大畑畑です。私の入った農家は、約三百町歩の土地を持ち、併せて千五百頭の家畜を飼養していました。日常生活を通じ、まず感じた事は働く時とレジャーの区別がはっきりしていることです。機械が発達しているでそれ程働かないのではないかと思っていたのですが、それとは逆に、むしろ日本人以上ではないかと思われまます。農繁期すなわち、とうもろこしの収穫、乾燥草の作成期には早朝から夜遅くまで頑張ります。大豆の収穫期などライトをたよりに夜中までコンバインを運転した日もあった程です。

しかし、どんなに忙しくても日曜日は、朝から休みとい

うのは徹底していました。平常の日より二時間遅く起き、家族揃って教会へ出かけるのです。気候、風土、食事などの全く異なる土地で精神的にも肉体的にも疲労気味だった最初の二、三ヶ月は、私にとって日曜日がどんなに有意義であったことでしょうか。

私も現在はまだ完全に実行できませんが、日曜毎に休める農業経営を考えている一人です。レジャーの点において、家族的に楽しんでる姿が非常に印象的でした。例えば、日曜の午後家族揃って、あるいは隣の家族等とさそい合って湖に行き、それぞれが持参した食事を、雑談しながら頂くとか、また夏の暑い日は、親戚が近くの公園に集まり、食事をしながら歌を歌ったり、持ち寄ったアルバムを見せ合うとか、とにかく家庭生活を非常に大切にしています。また学校におけるスポーツゲーム、音楽会、或いは各種団体の会議等が夕方から夜にかけて行なわれていたという事です。アメリカンフットボール、バスケットの学校対抗ゲームは全てナイターで行なわれます。体育館にぞくぞく乗り込み、大変な声援の中でゲームが行なわれており

ました。農業人口が多いアイオワ州だけに、日中働いている各農家の事を考えての事でしょうか。

私は現在二十数頭の肉牛を飼育しております。環境と衛生上の事を考えて、自宅から約一キロ程離れた所に山を切り開き半数放牧しており、すももちろん気候的にも耕地面積等も異なる関係上、私が見た体験を直接取り入れる事は出来ませんが、始めてから三年、どうやら軌道に乗りつつあります。夏のさわやかな朝、冬の冷たくひきしまった朝の空気を味わう時、また牛達がエネルギーギッシュにもくもくとエサを食べている姿を見る時、何とも言えない満足感がこみ上げてきます。

私がアイオワ州にいた時、

よく昼休みや日曜日等、自分の時間をみつけては一人で広い牧場へ行き、澄んだ大空を眺めながら、のびのびとした気持ちでいろいろな空想にふけたり考えたことがありました。そんな時、何か自分の身体がもくもくとふくれ上ってゆくような、言葉では言い表わせない、外国でなければ得られない何かを考えました。

私は、今でもその時の気持ちを大切に自分の心の中にしまひ込んでいくつもりです。

私は、この気持ちを私の人生に於けるプラスアルファとして、牛が大地を一步一步踏みしめて歩くように、自分なりの信念を持ち、あくまでも大きな気持を持ち、農業に生き抜こうと考えております。

感激の優勝旗を手にして

横芝中二年 海保 久美子

わたしは、小学生のころから中学校に入ったら、庭球部に入ろうと思っていました。兄が中学校時代、庭球部へ入っていたことも理由の一つです。クラブに入って始めのうちには、空ぶりの基本練習ばかりだったので、クラブをやめていく人も出てきました。が、数人の人たちが、絶対やめないことを誓い合いました。先輩たちの試合を見て、「わたしも早く試合にでた

仲になりました。寒くなると、コートを守らなければならない。この作業のめんどうさ、つらさは、庭球部員にだけしかわかりません。

二年生に進級して、わたしは初優勝の喜びを知りました。忘れもしません、それは飯岡の団体戦です。この時は皆んな飛び上って喜びました。七月には各大会が日曜日ごとに続き、練習も一段と熱が入り始めました。その上、実力、期末と二つもテストがひかえていきました。このころは、鈴木、小川両先生も直接指導で、練習もきびしさを増します。練習が終わって下校といっても、八キロも離れた家路に着くころには、もう外は真暗でその上お腹はすくし、体は疲れはてて泣きたい気持ちです。家に着くとすぐご飯を食べて、どうやらお腹がおさまると、こんどは眠気がおさめてきます。一、二時間寝てしまっただけです。案のじょう実力、期末とも今までより悪く、母には「勉強とテニスとを両立させなければだめだ」と、しかられてしまいました。キャプテンの加瀬君は、たくさん役員をしていますが成績がいつも良いのです。いいえ、加瀬君ばかりではありません。勉強と運動を両立させている人は何人もいます。だから「わたしにだって」と自分の心に言い聞かせ、次のテストは今まで以上に頑張

り、今度はテニスに全力を尽くすことを誓って、目前の試合に臨みました。

山武支部の予選では、団体で男女とも優勝し、個人で六チームが代表に選ばれました。しかし、県大会までの練習が大へんでした。特に二泊三日の合宿はきびしく、鈴木小川両先生は今までになく熱心に教えてくださいました。わたしの大きらいなグラウンドストロークを何回もやりました。

県大会の開会式の時、始めて優勝旗、優勝杯を見ました。その時は優勝するとは夢にも思っていませんでした。決勝戦の途中男子が優勝したと聞いたときは、一層元気が出てきました。努力のこいあって女子も優勝することができました。金メダルを渡されるまでは、優勝の実感がわいてきませんでした。優勝旗を手にしてはじめて優勝の喜びに心がはずみました。しかし次の日の個人戦は上位入賞は男子の一チームだけでした。前日の優勝にうなづかれたのがいけなかったのです。大会終って、つくづく「テニスをやっていたてよかったなあ。」と思えました。

わたしは二年生です。わたしを励ましてくださった町長さん、PTAの皆さん、そして自分自身のためにも、もう一年間練習と努力を重ねて二年連続優勝をなすとげ、さらに、高校三年生の時にくる千葉団体を目指そうと思